

石川雅望作『成田紀行』（神宮文庫蔵）の解説と紹介

粕谷宏紀

ここに紹介するのは、神宮文庫所蔵の石川雅望の紀行文『成田紀行』（写本）である。本書は『国書総目録』によれば神宮文庫以外にその所在を知らない。

まず体裁は縦二〇・四cm×横一三・〇cmの十二行の罫紙十一枚に書写され袋綴じされている。つぎに本書の由来をのべると、書写者荒木弘孚（代々権禰宜であった孫福家七代弘含の嫡男として、天保元年八月二十九日に生まれた。伊勢の神官で孫福弘孚ともいい、『万葉集品物解摘要』をはじめ伊勢神宮に関する編著がある）の識語が記しているように、雅望の孫娘「とよ」（長女さちの娘）の夫であり、かつ狂歌の門人であった竹房白酒の子孫竹屋政蕉が持ち伝えてきたものである。公刊されなかったのは、内輪の者だけの小旅行であり、その内容も「別におかしきふし」もなかったためであろう。本書が神宮文庫に蔵されたのは、書写者荒木田弘孚が伊勢神宮の神官であったことによるものであろう。

内容は長男清澄（塵外楼）・孫の梅太郎（当年十四歳）・門人の山田早苗・竹房白酒および供の民二郎ら六人と成田参詣をすませ、ついで足をのばして常陸江戸崎（茨城県稲敷郡江戸崎町）在住の門人たちを訪問、途中水郷の風景を楽しみながら帰宅するという、約一週間（三月二十六日―四月二日）の小旅行の紀行文である。当時の成田参詣の様子や水郷の風景、また道中の苦楽が雅望の文で綴られており読者を楽しませてくれる。

さて、七十歳の老軀を旅にかりたてたもののはなんであつたらうか。雅望七十八歳の生涯のうち旅らしい旅をしたものは、文化元年の関西旅行（拙稿「石川雅望の『草まくら』の旅」高知大学学術研究報告二十五卷一号）とこの文政五年の成田参詣であつた。文化元年の旅は、隠棲を余儀なくされていた雅望の文芸界復帰の布石でもあつたが、今回の旅の動機を単に江戸人（江戸市民）の成田参詣という信心をかねた行楽であつたと考えてよいであらうか。たしかに

当時の江戸市民の生活からするとそのように思われるが、雅望の場合は他のモメントが大きく働いているようである。そのいくつかを記してみたい。

まず考えられることは、前年の文政四年三月十五日より深川八幡境内に成田不動尊の出開帳があり、雅望はじめ門弟たちが狂歌額を奉納していることである（『永久田家務本伝』巻六）。この出開帳は『増訂武江年表』にも「三月十五日より、深川永代寺にて下総成田山不動尊開帳」と記されている。現在成田山史料館に残されている狂歌額がこのとき奉納されたものである。

つぎに七世市川團十郎のために「成田山不動堂掛額」（野崎左文編『六樹園文集』慶應義塾大学図書館蔵）の代作をしていることである。雅望は五世團十郎と交流があったが、七世とも親交が篤く、たとえば七世の甲府公演に際して、同地の有力者たちに協力方よろしくとの要請書簡を送っている。市川家と成田山との関係は改めて説明を要しないであろう。さて、雅望はこの代作によって（代作が参詣後書かれたとも考えられる）、成田山を実見しておこうと考えたかもしれない。

つぎに常陸江戸崎在住の門人たちを訪問することもあわせて考えていたことである。中央の狂歌師たちによる全国行脚は、自派拡張のため必要であったが（前出拙稿）、その一環として、雅望は江戸崎へ足をのばしたのである。いま文中に記されている門人たちのうち、閨歴の判明する者を記すと、「元有」は「常陸江戸崎商家 名

元有字隣卿号緑樹園 商元有 俗称小林平七郎」（『新撰狂歌五十人一首』文政二年）のことで、他に商人・立言亭 惠斎の号をもっている。文政期における五側（雅望主宰の狂歌グループ）の有力作者で、文政五年の『狂歌評判記』には、恋之部に「至上上吉」と記されている。元有は国学に造詣が深かったため、雅望に目をかけられていたとみえ、

久々御音問を絶し候、御許容可被下候。扱此仁常陸江戸崎にて平七となり候、其風流を好み申され候。前々より御高風を仰ぎ渴望いたし被申候。仍而同道にて罷出べく存候処、此節俗事他行仕りかね候に付、此人計さし上候、御逢被下候様奉希候、近日中に罷出御礼可申上候、以上

六樹園飯盛拜

四月十七日

良阿上人様

という村田了阿あての紹介状を雅望から得ている（『手紙雑誌』一卷五号・田中善信氏垂教）。雅望から目をかけられたのは、前記したように国学の素養があったばかりでなく、元有の歌が「古事のみおほくよみいる」（八島定岡著『狂歌現在奇人譚』文政七年）ためであった。つまり和漢の書に通じていたことが、和学者でもあった雅望に気に入られた原因であろう。「長人」は「常州江戸崎人号蔵器園 青木氏紀長人」（『新撰狂歌五十人一首』）で「狂歌人名辞書」に「蔵器園長人 通称未詳 常陸江戸崎緑樹園門人 天

保四年四月十四日没す 年五十二」とある。「上風」は「常州江戸
崎人 号花信園 萩上風」(『狂歌人名辞書』)のことである。

「常成」は「緑酒園常成」(『狂歌評判記』)、「糸長」は「緑楊
園糸長」(『水魚大会狂歌合』)をいう。そのほか「実吉」「音澄」
「秋成」「言吹」「成俊」らは、いずれも雅望門下あるいは元有門
下の狂歌師たちであろう。「栗々庵」は「栗々庵万曆」(『新撰狂
歌百人一首』)のことで、文化年間より五側に属し活躍している古
参の狂歌師である。なお元有は雅望没後、雅望の孫梅太郎をよく補
佐して、追善集『十符の菅薦』を刊行している。

以上記した動機に、文化文政期狂歌界を二分した五側の主宰者と
しての自信、また和学者文芸家石川雅望としての自信(本文中にこ
のことをうかがわせるものとして『雅言集覧』のことが記されてい
る。同書は文政二年に私家版として第一冊、同三年第二冊、同四年
第三冊と順次刊行され、文政九年に書肆より改めて刊行された)
に、文政三年十月に深川本湊町に隠居所を建てて、やっと落ちつい
た気分になった(『新居狂歌合』)という精神的なものが加味され
て、雅望は成田方面へ足をむけたのであろう。

さて、ここで雅望と同行した山田早苗および竹房白酒について記
しておきたい。山田早苗は通称黒田勝右衛門、名は懿、字を徳雅、
号を橘樹園という。安永二年武州青梅の織物屋に生まれ、享和二年
江戸山田屋六世をつぎ、安政二年十二月九日八十三歳で没した。早
苗と雅望の交遊は、従兄黒田勝五郎忠世の妻の弟兵蔵が、雅望の長

女「さち」(天明二年生)を妻に迎えたことよりはじまり、以後五
側の有力作者となった。彼は狂歌ばかりでなく文筆をよくし、約三
十四種の著書がある(『玉川源日記』解説)。また蔵書家でもあ
った(早苗自筆の『和書蔵書目録』によると三千二百余巻の蔵書が
あった)。早苗はこの旅行について「四月七日出立、六樹園先生、
塵外楼、梅太楼、竹房、早苗、供二千(金)ヲ俱(寄)シ御(寄)候、成田、筑波、
鹿嶋、銚子旅行 金三両路用」(『永久田家務本伝』巻六)と記し
ているが、「四月七日」は早苗の記憶違いであろう。なお早苗は、
文政七年に竹房白酒とともに再度成田山へ参詣をしている(前掲
書)。早苗自筆の自叙伝『永久田家務本伝』十二巻(天保十二年成
立・現在東京都青梅市教育委員会蔵)は、文化文政期の狂歌界の動
向がわかり貴重な資料である。

竹房白酒は、雅望門人の狂歌師で雅望の孫娘の夫でもあった。早
苗は「兵蔵妻さちをうめり八成長して名とよ」此とよ後に竹屋伊左
衛門狂名竹房白酒に嫁して一女をうめり、しかるに竹房のもとを離
別して師(注・雅望)のもとに帰って後、又何がしに再嫁し給へり」
(『永久田家務本伝』巻十二「石川雅望一族小伝」)と記している。

この時期には、まだ「とよ」と離別していなかったであろう。竹
房が筆写しておかなければ、この『成田紀行』は伝わらなかったで
あろう。

『成田紀行』は、前記したように文芸的価値は低いが、石川雅望
研究資料として、また他にその所在を知らない稀観書ということ

紹介の意義は十分であろう。最後に成田紀行の行程を参考のために記しておく。

永代橋―万年橋―中川の関―利根川―行徳―葛西―船橋―大和田―上野新田―臼井―佐倉―酒々井―中川―成田―土居村―押畑―新妻―芦田―荒海―磯部―滑河―源太河岸―大田―小野―江戸崎―羽賀村―松山村―伊佐津―狸穴―堀割―丸太―中山―曽根―加納―六軒―中の口―堀作―亀成村―臼井―鎌が谷―八幡―行徳―箱崎
この順路は当時の成田参詣や銚子、常陸方面への一般的ルートであった。

おわりに本稿を成すにあたって、翻刻を御許可くださった神宮文庫、同文庫長鈴木義一氏、また紹介の労をおとりくださった岩田貞雄氏に感謝いたします。

凡例

翻刻にあたって、つぎの点を考慮した。

一句読点。濁点は私意につけた。

二平仮名で記された固有名詞は（ ）内に漢字で記した。

三丁替りは「でしめた」。

四現行の漢字に改めた。

成田紀行

としごろしもつふさの国なる成田山にまうではやおもひわたりつれど、はさりおほくてえはたさずなりぬるがくちをしとて、こたび

は何ごともしらず出たちなむとその用意しつ。子なりける清澄、孫なる梅太、ずさなる民二郎ひきつれて、やよひ二十六日暁よりおきいでゝさわぎのゝしる。ともにゆかむとちぎりかはしゝ赤坂なる竹房のあるじ、橘樹園のあるじのきたるをまつほど、いとひさしくて日たけぬ。けふはうちくもりて雨やふりなむなどいひあへれど、とゞまるべきにあらずとてしたくゝひぬ。辰の刻頃竹房きたり。早苗ぬしいかになどいへどむごに見えず。己時とおぼしきころ、早苗きて汗おしのごひつゝ、よるよりしたくしつれど、おぼえずねすぐして鳥の声におどろかれておきいで」つれば、かうおそく成ぬといひてわらふ。家のまへなる川より船にのりつ。此舟屋根あれば、雨ふらむともしのぐべくなど人々いふ。こぎいでゝ大川にいでゝ永代橋の下をくぐりて万年橋といふより右の方にをれてゆく。早苗がずさなる男もてきたる荷をほどきて菓子とり出たれば、茶を煮させて物がたりしつゝゆくほど小奈木沢をすぎぬ。(小名木)舟をさなる男、ひだりの岸におりていづこへかゆくと見るほど、一人の男をやとひきたり。なにするにかとみるに、この男舟の底につなをつけて、おのれは岸におりたちて此舟を引つゝゆく。綱のながさ三、四丈もありぬべし。さはるべき岸の樹どもをも綱をうちなげてさきの方へ出て、猶綱をとりてひきゆくさまいとなれたり。中川の関といふあり。舟をさがしこまりて、舟のうちにわらは侍り、男にて侍りといへば、守る人の声してとほりゆくべしといふ。舟」は大きな川に出ぬ。こはそこは濁りてどよめりしとね川の流れなりけり。船みちいと長

ければ、人々あくびしわたしてをり。からうじて行徳といふ所に舟つきぬ。これより舟をかへし、人々岸におりて、しからきといふ家に入て、ものしたしめて枕ひきつゝいそぐ。町めく所をはなれてゆほひかなる所にいでつ。こゝは塩をやくところなりとぞ。

かしこにてひばりやあがる塩がまのけぶりへだてゝ声のきこゆるかうなどいふものをこに入て、になひゆく人あまたみゆ。かさいといふ里にていこふ。なしやうなる田はたを過て舟橋の駅にいたる。

太神宮のみやしろにぬかづく。あたりのさまかうくしくたふとし。此社の下に酒うる家ども見ゆ。そこに入てものくひ酒のみてをるほど、あやしきうばのいできて、大路にたちをる人にむかひて、大声に物うちいひてをどりくるふあり。なぞとみれば左の手につゝみをもち、「右にあふぎをとりて聞しらぬうたなどうたひて此みやしろの石坂をのぼりゆく。わらはべなどおひきてなぶりのゝしる。いかなるものにてかうくるひとはなりぬるとおもへばいとほしくぞおぼゆる。こゝにて馬をかりて、荷おはせつゝ大和田へといそぐ。いとひろき野原にて馬どもあまたあそびをり。はらばひたるもあり、かけりゆくもありて数しらず。おほかりと見るに、いづれもくゝみなやせたる馬どもなり。冬より春の比までは、草かれてくふべきものなければ、かくやせさらばひて待りと口つきの男いふめり。

若ごまのあそぶ春のにつながれて道ゆく人のあしもすゝまず
もちひうる家に入て茶をのみて、くれぐゝに大わたのうまやにつき
てあづまやといふ家にやどりぬ。夜なかばかりにふとめざめてきけ

ば、へだてたるさうじのあなたにて、うめきよばふ声す。ばうざなるべし。声たへがたげに聞ゆ。えやみにやあらむ。ねぢのやまひはこと人にうつるなりといへば、そゞろおそろしくていもねられず。雨のおとのきをたゞくおとす。わびしくてとく夜もあけなむとおもふ。

さゝのやはおとせぬものを旅人のむねにぞひゞくけふの春雨夜あけて此病者のことをとへば、馬より落ちたる人の此四、五日こゝにとゞまりゐてやしなひ物すなりとわらはがいふに、いさゝかなぐさみぬ。あさげくひてたちいでむとするに、雨をやみなくふれば、からかさをかひえてかたみにさしつれてゆく。道いとあしくてようせずば、ころびたふれぬべし。二里ばかり行て上野新田といふ所に、あたらしく小屋つくりし茶うる姥をり。こゝにいこひて茶はほしがらず。わかかへりたる湯をいたすべし。もて来たる茶をいれてすゝりなむといへば、嬢わざとくはへたる茶をものして侍れば、まづきこしめせといひつゝ茶碗にいれてもて「きたるをみれば、いろもかもよろしげなり。嬢がそばなる茶を入たるかみぶくろに、山本山とかきつけてあり。こなたにもてきたるもおなじ山本山といふ茶なれば、めくばせつゝつきじろふもをこなり。雨もやみぬ。ゆきくゝて臼井の駅つくる所にて、大田屋といふ茶店に入て尻かけをるほど、例の清澄がいひつけたるなるべし。酒さかなひぎのまへにならべつ。あるじこゝろきゝたる男にてになくあつかひものす。此庭より印帳の沼ちかくみゆ。馬をやとひてかはこなどおふせてたゆた

ふほど、しりにつけたる笠、風にふためくにおどろきけむ。此馬さ
わぎてかけいだしぬ。つけ置たるかはこ笠など、田はたの中にうち
すて、ゆくをすさなるものおひてひろひかへりぬ。馬は右のあぜを
つたひてはする。口ひく男あわて、おひゆきけるが、かげも見えず
なりぬ。人々あきれてうちみやりをるほど、いかにしてとらへたり
けむ」口ひきてつれかへりぬ。またこれに荷をおはせて、桜をさし
てゆく。道のさま田畑のみにて、いづこもくひとつけしきなり。
佐倉にいたりてあやしき家にいこふ。成俊といふ人の家がひゆく。
いであひてよろこびて、おのれともにまうでなむ。これよりあな
たに藤の花ある家侍り、かしこにゆかせ給へといふ。ゆきてみれ
ば、いひしもしるく、大きやうなる棚作りて、藤こちたくは、せた
り。さかりなれば庭にたゝずみてみる。家とく茶を煮てもてなすは
ど、成俊わらぐつはきてきぬ。うちつて立ながら栗々庵をとぶら
ひて、酒々井といふ所にいたるに、こゝにてひるげくひて馬をかり
ていそぐ。けさの雨に道あしく成て、わらぐつのそこに泥つきて、
是をはこばす事やすからず。坂めきたる所にてはすべりたふるゝこ
とたびくなり。中川といふ所にてむなきうる家あり。さうじすべ
き日なればなんくはですぎぬ。所々休也。わらひつゝ申さがるほど
に成田」の里につきぬ。成俊とかくあつかひて、えびやといふやど
りにいざなひぬ。わらぐつのまゝ不動尊のみはしものゝにいたり、
ぬかつきてあすこそことさらにまうでぬとて、かのえびやが家にか
へり、わらぐつぬきてたかどののぼりぬ。此家居るはしく目を

おどろかしぬ。さてさまゝのくひものなどとりならべて酒くひな
どするに、うつはもなにも風流をつくしていさゝかたらはぬことな
し。こは成俊子がはやう宿のあるじにかたらしあはせて、かういか
めしくまうけいでたる也けり。魚どものあざらけきに調したる塩梅
などえもいふべからず。大江戸の庖丁家といふどもつめくはふべき
さまにぞみえたる。この家は成俊が年比のとくにや、女ばらにも
なくあつかひものして、まかなひかしづくさま、こよなくやどのゝ
さまなどうるはしうきくしくつくりなしたり。酔すゝみてまく
らひきよせてふしぬ。あるじ猶のぼりきて、もて」なしあへしらひ
をり。二十八日、あさげくひて不動尊のおまへにいたりてふしをが
みて、さて山のうちをみめぐらふ。三重の塔、経堂、なにくれの御
堂いづれもひかりかゞやきて目くるめくばかりたてならべてあり。
としをへておもひしこともやすらげくけふぞなりの山にのぼれ
る
断食堂といふあり。こゝろみにのぞきみれば、おとがひさがりたる
男の目をおほきになしてみあげたる。むくくしければとくにげい
でつ。それより別当新勝寺をとぶらふ。別当いであひて酒さかな
いたしてもてなす。執事の男、法師ばら扇あまたもてきてものかゝ
す。こゝを出てやどりに帰り、成俊とわかれて、これより常陸国な
る江戸崎へゆかむとす。竹興もてきておのれをのす。こは宵より成
俊があつらへ置たるなりけり。かはこの類は、はやう源太河岸とい
ふ所まで便り侍れば、馬におはせておくりやりつとあるじいふ。そ

れよりふたゝび御山をのぼり」て、うしろの方に出て坂をくだり、土屋村といふをへて、おしはた、^(押畑)にひつまを過、芦田といふ所の茶うる家にいこひ、荒海より磯辺^(部)といふ所にいたりて、例の酒うる家にしりかけて蕎麦などくふ。またおなじやうなる道をあゆみて、滑川なる観世音にまうでぬ。こは坂東の札所とかいひていかめしき御寺なり。そこを出て源太河岸といふ所につきぬ。かのえびやにあつらへつる荷どもは、はやくこゝなるむさしやがもとにきつきてありき。こゝにて物くひて出たゝむとするに、わたし舟むかひの岸にありといへば、こぎくるあひだしばし縁にしりかけてをるほど、こゝのあるじなるべし、わかき男のおのれにむかひて、成田のたよりに承りつ。風流をすかせ給ふ人のよく御名うけ給はりたくといふに、うちわらひていらへもせであるを、早苗かたへより六樹園と申翁なりといへば、雅言集覽といふふみつくらせ給へる御人なり。おのれもかのふみもちて」侍り。はやく御名をしり侍らば、短冊にてもとうでゝ御筆こひなまじ。くちをしなどおとろゝしくいふ。江戸崎へゆかむに、たゞちにありやととへば、これよりさだめたる道なし。あぜをつたひてゆく道なれば、しるべなくはまどひ給ひなむといふ。さらばあないしりたる人をやとひてたべといへば、四十ばかりなる男いできて、かの荷どもをになひてゆかむといふ。渡し舟にのりてむかひの岸につきぬ。かのしるべの男をさきにたてゝゆくに、川ある所に出ぬ。土橋をわたりてあぜめいたる道をゆく。しるべする男、足はやくてようせずば、おひまどはさむことをおもひて、足

をそらになしつゝつきそひゆく。大田といふ所にいたりていこふ。いそぎゆくほど、小野といふ里に出ぬ。逢善寺といふてらあり。二王門たてり。本尊は大悲者なり。山門のかたへに大きな杉の木あり。をのゝこまちが墓^(小野小町)しるしなりとあないせる男いふめり。」さて小川ある所にいたりぬれば、かのしるべの男、これよりいとま申てまかりかへるなりといふ。ずさらいなゝ江戸崎までのしるべとてやとひたれば、こゝよりかへらむことわりなしといへど、此男あながちにかへりなむといそぐ。むつかしければ、さらば心のまゝにせよといひてかへしやりつ。こゝはをの川とぞよぶめる。舟にてわたる漁人にやあらむ、鯉ふたつを桶にいれて舟を岸につけむとす。此あたり、山みづのきよらかなるさま絵にかゝまほしきけしきしたり。それよりたどるゝ江戸崎につきぬ。竹房はさきにみつる鯉をかひとりとて、藁につゝみてもてきつ。なにの料にかとへば、川にはななむ事をおもひてもとめえしなりといふ。此里のうしろに大きな流れ見ゆれば、かしこにもてゆきてはなちてむといひて、右のかたにをれてゆくに、さて小林平七といふ人の家いづこぞとへば、そはざれ歌よ」める釜屋のあるじがこゝてをしふ。その門に入てとへばあるじはなし。老たるうばいでゝいらへすなり。さらば長人がりゆかむとて、そこを出て二町ばかりゆけば、京伝屋といふしるしの暖簾かけたる家あり。あないすれば、あるじ出てねぎらふことねむごろなり。からうじて竹房、梅太を引つれてきつ。かの鯉をはなんとするに、少々よわりたれば中流^(なかつり)になはつこそよけれ

とて、所の人々ちいさき舟をいだしたれば、これにのりてこぎいで川中にてはなちつとかたる。此となりなるおなじ筋の名にて、長人が本家なりとぞ。そこに老たるうばのありけるが、わづらひて死うせぬれば、ものさがしくてとゞめ奉らむもふびんなり。よろしきやどりにいざなひまゐらせむなどいふほど、平七きたりてめづらしき御わたりなり、さらばいさゝせ給へとてさきにたちてゆく。平七といふは元有となりのりて、いみじきすき人なりけり。此あたりの人々は、此人にならひてをかしき歌などをもひねりいだすなりとぞ。長人の家のむかひなる所よりをれゆきて、万屋といふ家にやどりつ。元有、長人つきそひゐてそゞぎさわぎてあつかひ物す。二十九日、ていけよければ出たちなんといへど、元有長人聞もいれず。

(筑波)

せむすべなくてとゞまりぬ。早苗はつくば山より鹿島のかたへゆくとしてこゝにて別ていぬ。元有此あたりに石にて彫める五百の羅漢侍り、ゆきてみ給へといふにつれだちゆく。江上山瑞祥院といふ禅林にて、寺のさまものさびてたふとし。たかき所に石もてつくれる羅漢ならべすゑてあり。おのゝ施主の名をゑりつけたり。寺のかたへに山ありて金毘羅の堂あり。それより大念寺にまうづ。十八檀林の中にていかめしき寺なり。又医王山不動院といふあり。天台宗にて「八箇の檀林の中なりとぞ。二王門あり。この頃つくりたりとおぼへてあたらしくみえて莊嚴おろかならず。かへさに髪つかぬる家に入て、髪つかねさせ万やがおくのまに入てをれば、耳ちかく大鼓の音すなり。なにぞとへば、ぢやんゝほ也といふ。いぶかしく

とへば、此あたりにては、葬送をぢやんゝほと申すなり。柩をおくりいたすまへに、たいこをうちまはりて、そのよし一村の人にしらすなりといふ。しばしありて、とのかたさがしければ出てみるに、葬送のこしをかきてゆくなり。こしのまへに法師二人鑊鉢とどらをならしゆく。たいこうちてゆくあり。ひたひゑぼしたるわらはもみゆ。女二人しろき衣きたるがおくれてゆく。此あたりの人あまたちならびておくりす。ぢやんゝほとは此なり。ものゝ声をいふにぞありける。

なき人をおくるとみればきのふよりつゆけさまる旅衣かな」

この葬送は長人がしそくの家よりおくりいたしつるなり。ひる過る比、あたりちかき人々とぶらひきつ。けさのぼりまうでし大念寺に、徽宗皇帝のかゝせ給へる鷹の絵あり。神祖いまそかりし時、こゝの住持に給ひけるとぞ承はる。常に人拝すことかたく侍れど、うちゝみせ奉らんと院住の申て侍りといふに、人々ともなひてふたゝびかの寺にゆきぬ。客殿とおぼしき所にかの一軸をかけたなり。真偽はしらず。いとふるきよのものとおぼゆ。院代とかいへる法師の部屋に入るものかたらふ。たんざく、しきしなど出してものかけといふに、あとなしごとかいてしらせつ。やどりにかへりぬれば、常成、言吹、秋成、上風、音澄、糸長、実吉、春風などきゐて、所につけたるさかないだして酒しと歌などよむ。

ひたちには男のみにあらずされ歌のをかしきふしもつくるますらを

など例のざれごと、此外にもうめきいだしつるがみな」わすれつ。

人々おのがしゝ紙とうで墨すりてさしつけたれば、例のつたなき筆ふるはしつ。夜もふけぬれば、みな人の酒のむをも見すぐしてかたへによりてふしつ。四月朔日、このやどりをたちていそぐ。人々おくりきてわかれをなす。竹こしかく男二人、わたりある所までめしつれ給へと元有長人いふめり。元有はいかめしくていでたちて、猶おくりすとてつきそひきつ。波賀村、^(羽)松山村、伊佐津、狸穴などいふ所をへて、中山、曾根、といふ所へきつ。この酒店にて元有とわかれぬ。さて堀わりといふ所にていこひて、丸太をすぎ加納といふ所にていこひてひたすら道をいそぐほど、いさゝか雨ふり出ぬ。此道とおくてだれゝもつかれぬ。からうじて六軒といふ所へつきぬ。わたり場のまへに茶をうる家あり。むつかしげなれど、みな人うゑたれば爰にて物はむといふ。飯なし、ことさらに調してまゐらせん」とて、釜に米をいれて妻なるものゝ火をたくを人々ともゝくたすけて飯いできぬ。げに林に落ぬるましろの木をえらばぬこゝちして、この飯うまき事醍醐にまさりぬ。江戸崎よりこゝまで六里ありといふ。こゝにて興かく男どもをかへしつ。舟にのりてわたる。天地のわたしといふ也とぞ。中の口といふ所をゆきて堀作といふ所にいたる。こゝは町めきて家どもゝならびたてり。白井への道をとへば、左へをれてゆき給へとをしふる姥あり。そこをゆくこと四、五町ばかりして川ある所に出ぬ。左右に道なし。もとの所へかへりなんや、いかにせまじといひてたゞすみゐるほど、ちひさき舟みつよ

つこぎつれてめのわらの藻草とるが出きたり。此川わたしよといへば、うけひきて舟さしよせつ。わたりはてゝ錢いだしてやれば、かしらふり手かきてとりをさめず。金を藻草の中に置いて舟よりかりぬ。ゐなかうどのすなおなるありがたくぞ」おぼえたる。さてかめ^(龜)なりといふ村を通り、大きな原をこえて所々にいこひつゝ、くれつかた白井にぞつきたる。宿りのあるじは、藤やなにがしといひたる。二日、雨ふりぬ。例のからかささしていであつ。おなじやうなる野はらをゆきて、鎌がやといふ所にていこふ。爰にて馬をかりてゆく。雨いたくふりいでゝ旅衣しとどにぬれぬ。ひつじにやなりぬらむ、やはたの駅につきぬ。こゝの宿のはしつかたなる中村屋といふ家に入て物などとりしたゝむ。あるじの翁くちきゝにて、ちかくよりきてものがたりす。をかしければうち急みつゝきくに、ひとゝせ成田まうで給ふとて、僕人あまたぐしたる御かたの翁か家に入てやすらひ給ひぬ。酒などきこしめして、たゞうかみに物かきてあるじの翁にやれとてたまはりつ。ひらきみれば俳諧の発句といふものなり。おのれいひけらく、こはさとびたることにてふさひ侍らず。やんごとなき御わた」りの御もてあそびぐさには、詩歌などこそあそばさまほしけれ。かゝるものは、翁はみまうきこゝちして侍りと申せば、聞かせ給ひてをもしろきこといふ翁かなとてたゞせ給ひぬ。そのあくるとしの秋、又こゝにきたり給ひて、さきに翁がいさめたるに聴て学問のみすなりとのたまひて、こたびは詩つくりて給はりき。げにあらまほしき御すさみなりと感じていたゞきて侍れば、わ

はひて別れゆき給ひぬとかたるもいとほらしげなるおもゝちな
り。此翁ふみなどよむ人なるべしとゆかしけれど、いそぐたびなれ
ば聞すてゝ出ぬ。それより一里ばかりやゆきぬらん。行徳につき
ぬ。かしまやといふたかどのにのぼりて、ひるげくひて名だゝる温
鈍などかひえて舟にのぼりつ。雨そぼふれば筥うちかけてあれば、
いぶせき舟のうちなり。申の時は(箱崎)こさきの河岸につきぬ。長嶋やが
もとにて、あしだかりてからかささしてかへりぬ」

文政五年壬午四月

石川雅望

是は江戸赤坂竹屋政蕉が逢来て広く送りよこせし也。文中は別にお
かしきふしもなければ、めづらしきものぞ写し置ぬ。此政蕉は文中
にある竹房といふ人の子孫なるべし。原本に竹房蔵書といふ印を末
におしたり。先代の書しまゝを送りしものなるべし

荒木田弘孚

(教育学部助教授)